

観音物語 (22) 悲しみに震える

ひ たいかいらいしん じ い みょうだいうん じゅかん ろ ほう う めつじょぼんのうえん
 悲体戒雷震 慈意妙大雲 澍甘露法雨 滅除煩惱燄

悲体の戒は雷の如く震い 慈意の妙は大なる雲の如く 甘露の法雨を澍いで 煩惱の燄を滅除す

干ばつのために農作物がしおれ始めた。農夫たちは水桶を肩に担いで急峻な段々畑を往来している。乾いた土に水を撒くこと幾百度か。これでもか、これでもかと、水を打つ。いくら水を注いでも作物は貧弱だ。「干ばつに不作なし」とはいうものの、日照りが四十日も続けば心配がつのる。

畑が熱い。土の表面はまるで亀の甲羅のように割れている。亀裂した畦道を歩けば土埃が立つ。その埃がつむじ風になって舞いあがる。埃が目に入って痛み、悲しい涙もあふれる。

この村は各農家がそれぞれの野菜を栽培して出荷している。アスパラガス、えだまめ、おくら、かぼちゃ、キャベツ、きゅうり、グリーンピース、さやえんどう、ししとう、しそ、じゃがいも、すいか、そらまめ、とうもろこし、トマト、なす…。多彩な野菜を見学しながら歩くことができる美しい棚田の観光地である。農家が共同出資して新鮮野菜スーパーも経営している。

棚田の中腹にサルスベリがある。細長い枝の先端にピンクの花がゆったりと揺れている。乾いた畑の野菜たちに「元気を出せよ」と、エールを送っているようだ。そのサルスベリの上の段には巨大な樗が立ち、油蟬がしきりに鳴いている。老いた農夫は樗の根元に腰かけ、乾ききった畑を眺めおろしながら大きな溜息をついた。サルスベリの花が風に揺られて老人を扇いでいる。動いているのはサルスベリだけで、野菜はぐったりとしている。

「観音さま、雨を恵んでおくれよ」

老人はうらめしそうに天を眺めた。

「観音さま、畑に雨を…。おらたち、このままでは…。おらの村は…」

老人は青空を仰ぎながら合掌した。太陽はギラギラと渦を巻いている。天を仰いでいると涙が溢れる。

「ナム カンゼオンボーサ」

「ナム カンゼオンボーサ」

「ナム カンゼオンボーサ」

心静かに祈り続けた。そのとき空が光った。東空から黒い雲がモクモクと湧き出してくる。みるみるうちに雲が天を覆い、こちらへ迫ってくる。黒雲が光った。その途端に雷が鳴った。轟音は東から西へ走っていく。雷神が大車輪を雲の上で転がし始めた。

激しく降る雨に、老人は麦わら帽子を深く冠りなおして腰をあげた。腰を曲げ、背中に両手をあてながら全身ずぶぬれになって段々畑をゆっくりと下っていく…。そのとき、落雷が樗を直撃した。大音響に驚いた老人は樗を仰ぎ、震えながら片手合掌。

「ナムナムナムナム…」

パツパツと口をあけた太い幹から煙が立ちのぼっている。

観音菩薩の大悲が大粒の涙になって落雷したのだ。棚田のいたるところで雨水がチョロチョロと音をたてながら小川のように流れ始めた。農家のあちらこちらから家族が出て来て、久しぶりの雨に歓喜している。村人たちは両手をいっぱい広げて仰天している。老夫婦はあんぐりと口をあけて甘露水を戴いている。子どもたちは雨のシャワーで顔や手を洗って戯れている。青年たちは肩を組み、輪になって、ずぶ濡れの乱舞が始まった。サルスベリの花も一緒になって踊っている。